

先日アメリカで、脳腫瘍で余命何ヶ月かを宣告された若い女性が安楽死したというニュースがあった。安楽死が認められている州に移住してまで安楽死を望んだらしい。脳腫瘍がどんなもので、どんな苦しみが襲ってくるのか経験したことがないで、彼女の死への恐怖など推測できないが、いずれ、だれにも死は訪れる。恐怖にうちひしがれる死もあるだろうし、まあこんなもんかとなく納得する死もあるだろうし、死は生者一人ひとりの顔をして訪れてくるだろう。

最近、尊厳死ということが語られている。尊厳死と安楽死の境界がどこにあるのか詳しくは知らない。ともに、自分の死を自分で決めるということは共通している、という認識ぐらいしか持っていない。尊厳死のほうは消極的な決定で、安楽死のほうは積極的な決定、かなりの認識でいいのだろうか。

まあ、死に尊厳と安楽があつたなら、ひとは自分の物語を編むことができた満足感をえて、みずからの生を終えるという自己満足感がえられるのかもしれない。ひとは生まれてきたことを自分が選べなかつたぶん、死の物語はみずからの手で、という欲望を果たしたいと願うのだろうか。

しかし、生まれてきたことが自分の意思でなかつたとしたら、死もまた自分とは無縁のものとして、身体そのものの行く末に身を委ねてもいいのではないだろうか。

安楽死、という表現がひととしての尊厳をひきつけているようにだが、自死に変わりはない。先のアメリカ人女性は家族や友人に看取られて死んだからいい死に方だと言われているが、ほくはそんな死には立ち会いたくはない。死とは、もつとぶつきらぼうで、惨めで、仮借のないもので、油断も隙も与えてくれ

らない、とおもっているようだ。

ほくの死はどこかに打ち捨てられたい、と願っているのだが、いまの世のなか、打ち捨てられる死、どこか山のなかで野垂れ死にしてひと知れず土に還る死、などというというロマンティックシズムは時代錯誤になつてしまつている。(そんなことしたら、だれかの通報で捜索隊がでて、いろんなひとに迷惑がかかることもあるだろう)

おまけに、生前葬なんてものがあるらしく、生きているうちに世話になつたひとたちに礼を言いたい、なんていうつもりなのだろうか、よくわからないが、死は常に他者の死であることを考えれば、生前葬なんてクソみたいなものである。

ほくは葬式、というか、現在の葬祭センターのシステム化した葬式が嫌いである。あれにはどうも馴染めない。ああいうシステムには世話になりたくないとおもっている。

死は非常に個人的なもの、自己幻想的なものであると同時に、社会制度のなかに組み込まれている、共同幻想としての側面を持つている。むかしは集落が担っていた役割をいまは葬祭センターが取って代わつているのだが、おのずから、死者にたいする親和性といったものが排除されたシステムでしかない。とはいえ、もはや葬祭センターなしに葬儀をおこなうことは困難になつてきている。病院と組んでいる葬祭センターもあるらしい。死も商業の枠組みのなかに組み入れられていて、それを利用するひとたちも、隣近所という煩わしさを金銭に置き換えることで免れている側面があるのだろうか、ほくもまた、あんなシステムには世話になりたくないといいながら、最後は葬祭センターが用意した棺に収まるということになるだろう。少々胸

ないもの、のたうちまわるものだとおもっているから。二度と再生できないのなら、それぐらいの阿鼻叫喚を体験してもいいではないか。初期の初期の置き土産として。

ハイデガーにいわせると、ほくたち人間は(かれは現存在といっているが)「死」を心的に体験することも、対他的に代理体験することもできないのに、死は常に存在しており、人間は死ぬもの、「その死にむかつて存在している」存在である。なんとやるせない存在ではある。

だから、といつていいだろうか。そのやるせない存在を自分なりに始末をつけようとしてもいいのだろうか、最近、自分の言葉で自分のおもいを書き残そう、というエンディングノートというのもあるらしい。倒れたとき延命治療はどこまでやつてもらおうのか、葬式はどうやつてもらおうのか、自分の希望を書き残しておくそう。そのなかには、どこかで倒れたときのために住所氏名、服薬中の薬名など書いておいたりするらしいから、もはや野垂れ死にという究極の死は回避されてしまふそう。

死ぬということはだれかの世話になるわけだが(いや、生きている、というか、ひとの存在そのものがだれかの世話になつていることなのだが)、その負担をすこしでも少なくしたいというおもい、あるいは、死にあたって家族も自分も辛いおもいをしたくないという気持ちがあり、そういうなかで、自分のおもい描いているような死に方をしたい、とおもっているひとが増えてきている証左だろう。

ひとは、そこらへんの動物とは違って理性や知性があるから死に際しても「尊厳」を持つてもいい、いや、持たなければな

くそ悪いのだが、遣された家族がほくのために、棺を買い求め、焼き場はじめ役所の手続きを肅々とこなしてくれるとおもえない。面倒だから葬祭センターに一任する、そんな気がしている。まあ、ほくは死んでしまつているのでそこらへんのことにはわからないから、胸くそ悪くもならないだろう。

個人の偲び方には個々それぞれの作法があるとおもっているから、葬儀には出ないことにしている。それでも身内の葬儀というものはある。この数年で、母と叔母ふたり、義父の葬儀があつた。いずれも身内だけの家族葬といふのですました。一応、それぞれ帰依していた宗派があつたので、縁もゆかりもない、葬儀センター契約の坊さんが来ることはなかつたが、ほくのばあい、帰依している宗教なんてものはないので、葬祭センターで雇つた坊さんが来て、縁もゆかりもないほくの成仏を祈念してくれるのだろうか(それも仏教のひとつのありかたといえ、そうだろうか)。その情景を見てみたいとおもつたりもする。生前葬というのは、もしかしたら自分の葬儀の滑稽さを自分で楽しむものなのかもしれない。そんなふうな諧謔的に笑い飛ばせるなら生前葬も悪くはないかもしれないが、葬祭センターのほくそ笑む顔がちらついてしまつて、ああ、気持ち悪い、とおもつてしまふ。

身内の葬儀はともかく、知人の葬儀にはもう長いこと行つてない。

最後に行つたのは、五年ほど前、長野恭二のときだった。暗黒舞踏出身の長野とは20代後半から30代にかけて、高知でアマチュア劇団を運営していた。ほくは座付き作家で、かれは演出

兼役者だった。

高校時代から下手な詩を書いていて、言葉の罫に絡めとられて身動きのとれなくなっていたばかりにかれはさまざまなヒントをくれた。そういう意味ではまったく異分野の暗黒舞踏を一〇年もやっていた長野と出会えたのは僥倖だったとおもっている。かれがいなかったらぼくはたぶん、言葉をごねくりまわしただけのつまらない詩を書いていたとおもう（いまでもそんなにいい詩を書いているとおもっていないが）。

実際、「言葉なんてたいしたもんじゃない」とでもいうように長野はぼくが書いた台本からセリフをカットしてしまったこともあった。言葉のない舞台は役者の肉体が躍動する美しい空間になったりして（その逆な場合も当然あったのだが）言葉がなくても肉体で伝えられることもあるんだ、ということをおもわたり、いやいや、おれのお言葉のほうが美しい、とかおもいながら楽しい時間を過ごしていたが、劇団も人数が多くなるにつれて、新劇をやりたいとか、翻訳物をやりたいとか、あげくのはてには世話物をやりたいとか、劇団員の要望がつのり、長野にしてみれば耐えられない状況になってきて、かれは劇団を解散した。そのときかれは「舞台で裸になれないやつは出ていけ」と無茶振りをした。

高知で劇団運営をやっていくために、かれはかれなりの妥協をしていた。演劇とは集団作業なのだから、かれはかれなりに劇団員の要求に耳を傾けてもいたが、どうしても相容れぬ一線があった。ここから先はダメだ、そういう一線があった。それはもつともだ。引けるところまでは引くが、引けない場所がある。そこで踏ん張らなくてどこで踏ん張るというのだ。

葬儀での弔辞は長野のもつとも信頼した友人が述べた。劇団があったころ、劇団のプロデュースを担当していた男だ。「ダイケ、ハンカチ貸せ」とかれは席を立つときぼくのハンカチを握りしめた。そして、嘘泣きをしながら、長野との思い出をあれこれ喋った。どうでもいい話だった。いい葬儀だった。

今年一月、片岡文雄さんが亡くなった。高校時代からお世話になりっぱなしのひとだった。突然の死だったので、通夜には駆けつけたが、葬式には出なかった。まあ、通夜もシステム化されているのだが、片岡さんとの最後の別れだとおもって通夜には出かけた。

ふだんは情が深くてお調子者で、アルゼンチンタンゴが大好きで、酔うとひとりでタンゴを踊っていた片岡さん、そのくせ、詩のことになると偉そうに傲慢で、自分の読みが唯一だとおもっていた片岡さん、地方と中央という対立項をたちあげて、自分を励ましながらか詩を書いていた片岡さん（その虚構に気づいていたのだろうか）、「地方にうずくまる」という命題をみずからに課してそれに殉じた片岡さん、その片岡さんにお別れを言ってきた。

ぼくは、死んだらそのまま燃やしてもらって、海かどっかへ投げ捨ててほしいと家族には言っている。一応先祖代々の墓はあるのだが、入らなくてもいい、と。（そうなるかどうか、死んだ後のことはわからない）

そう、ぼくはあと一〇年かそこらしたら死ぬ。いや、明日かもしれない。死は突如やってきてほしいと願っているが、そううまくいくことはない。

だから「舞台で裸になれないやつ」という言いかたは、暗黒舞踏というみずからの肉体だけを頼りに表現者として存在したいと願っていた長野の最後の砦としてのもの言いだとぼくはおもった。多数の意見を尊重して玉石混淆というだまし絵に埋没したくない。その無茶ぶりな言葉の奥にはそんなおもいがあつたのだと、ぼくにはそうおもわれた。

結局、劇団は散りじりになり、長野は少数のひとつと組んで「トータル・メディア・センター」という拠点をかまえて活動をはじめた。かつてかれが所属していた日本維新派といった暗黒舞踏団を高知に招いたりして、かれはかれなりの活動をするようになった。

ぼくは舞台で長野のオチンチンを見たいとおもわなくなっていたし、かれの（暗黒舞踏という）表現現場にぼくがいる理由が見えなくなっていたので、そろそろ去りどきだなおもい、やめさせてもらった。そのあとは一観客としてかれの舞台を見せてもらった。

劇団が分解したとき、新しい劇団をつくる連中に誘われたが、長野のいない芝居なんてなんの魅力も感じなくて、詩の世界に戻った。もう、暗黒舞踏などといったアンダーグラウンド的な方法論が支持されなくなっていた時代だったかもしれない。昭和五〇年代の初めのころだった。

それから三〇年ぐらい経って長野は死んだ。まだ60歳だったのに。

通夜と葬儀に出かけた。通夜では急に挨拶を頼まれて、死んでしまえばすべてよし、などとどうでもいいことを語った。葬儀に出るのは迷ったが、出た。

どういう死に方をするのかわからないが、延命処置だけはとらないでほしい、と家族にはそう言っている。尊厳死、とかいう大仰なことではなく、身体が死にたいといっている声を聞き届けしてほしい、と。その声に従うだけでいい。声に逆らってまで身体を維持しないでいい、と頼んであるが、このごろは、死に行くほどの行く末をどう処置するのかが、遺されていく家族の気持ちに任せてもいいのではないかとおもうようになった。

「死」は死者のものではなく、つねに「他者の死」でしかないことはだれも知っている。それだからこそ、自分の死だけは自分で決めておきたい、自分の物語を自分の手で終結したい、あるいは、生誕は自分の意思ではないのだから、死に際しては自分の意思を尊重してほしい、そういう気持ちで、自分の死に際しては延命処置をとらないでほしいとか、あれこれ自分の主張を書き残しているひとが増えているみたいだし、ぼくも延命処置についてはなにもしてほしくないとおもっているのだが、最近では、その選択はぼくの死を看取るひとたちの気持ちに任せていいのではないかと、とおもうようになっていく。

家族が、意識がなくてもぼくの存在を感じていたいとおもったら（こういう奇跡があるだろうか）、延命処置をしてくれない、もし、その延命処置がぼくの心身の負担となつて、苦痛を感じたとしても（家族にはその苦痛がわからないとして話だが）、それは家族の気持ちにそうだから、その苦痛には耐えていける気持ちが持てるだろう。もしかしたら苦痛で「はやく殺してくれ」と家族を恨むかもしれないが、それはそのときのこと、ぼくの死は家族のおもいに任せてもいい、とおもえるようになっていく。

自分の物語は自分で終結するのではなくて、書かれた物語は常に他者のものであるとおなじように、多くの死も他者のものである。

ひとは多かれ少なかれ、自分自身の物語を作って生きている。それはおおきな「物語知」に依拠しないと生きていけないひともいれば、おおきな物語の終焉を意識して個的な文脈を読み解くことで生きているひともいるだろう。ひとそれぞれに私的な物語を織りながら「その死にむかつて存在している」。

先日のBBS高知合評会するとき、参加者のなかに岩手の遠野に行ってきたひとがいたので、遠野物語の河童伝説の話がでた。遠野はいまは町村合併しておおきな町になっているが、その昔は閉鎖された村で、そのなかでは近親婚がおこなわれ、その結果、不遇な子が生まれた。その子が亡くなったとき、川に流した。それが河童伝説としてひとびとの物語として受け継がれてきた、と語り部タクシーの運転手が語っていた、という話があった。それについて、ああじゃないこうじゃない、という話をした。

たしかに柳田國男の『遠野物語』には河童の子を産んだが、その子は切り刻んで川に流した、という話が載っている。異種姦で子どもが生まれることはないの、遠野のひとたちは不遇な子の物語を作ったのだろう。吉本隆明ふうにいえば、自己幻想や対幻想を共同幻想に置き換えることで、集落のなかでの規律、規範を維持しようとしたのかもしれない。あるいは、自己幻想、対幻想と共同幻想の矛盾が、河童伝説という妥協案をうみだしたのだろうか。『遠野物語』についてはそれほど詳しく

ないのであいまいな言いかたなのだが。

それからもうひとつ話題になったのは認知症。ある医者がこんなことを書いていたという話がでた。その主治医の話とは、徘徊をしている老婆はむやみやたらと徘徊をしているのではなく、そのむかし、爺さんと初めて暮らした家を探して徘徊しているのだ、と婆さんの徘徊にはそんなロマンティックな背景がひそんでいる、というような話で、まあ、その話はその主治医の作った物語だろうが、そういう物語を真に受けて生きていくことでひとは、尊厳や尊敬といった感情を実感するのもかもしれない。

河童の話も徘徊の話も、ひとはそれぞれの物語のなかに自分と他者の生き方を投影して、その苦しみから逃れたり、忘れ去った喜びを再現して生きていく勇氣や根拠をえているのだろう。遠野の河童はわかったが、では、高知の猿猴エノコやシバテンはなんだ、ということになったが、これは物語をうまく語るべきでなく、みんなで笑ってごまかした。